



Title	コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM：サイマル放送と「トランスローカル」
Author(s)	村上, 和史
Citation	日本学報. 2013, 32, p. 147-163
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25558
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM

——サイマル放送と「トランスローカル」——

村 上 和 史

はじめに

1 今までの先行研究と問題点、これからの可能性

- 1-1 コミュニティFMとは
- 1-2 コミュニティFMと災害報道—情報発信の手段として—
- 1-3 「ローカル・コミュニティ」と「テーマ・コミュニティ」
- 1-4 サイマル放送の開始によって芽生えた、コミュニティFMの新たな可能性—情報発信の手段から「つながる」メディアへ—

2 「テーマ・コミュニティ」とストーリーミング放送—神戸市長田区・FMわいわいの場合—

- 2-1 FMわいわいとは
- 2-2 ストーリーミング放送の発展による、番組の変化と「テーマ・コミュニティ」

3 「テーマ・コミュニティ」とサイマル放送—北海道二風谷・FMピパウシの場合—

- 3-1 FMピパウシとは
- 3-2 アイヌというマイノリティとしての存在と、「テーマ・コミュニティ」
- 3-3 FMわいわいの放送との比較

4 東日本大震災とサイマル放送—「トランスローカル」の事例として—

- 4-1 東日本大震災発生後のラジオ放送の活躍
- 4-2 サイマル放送の発展がもたらす、トランスローカル

おわりに

はじめに

2011年3月11日に発生した、東日本大震災。私はその日、東京にいた。震災の影響で都内の交通機関が完全に麻痺し、大阪へ帰るために乗るはずだった夜行バスも運休になった。宿泊先や食料を探すため、多くの帰宅困難者と共に東京の中を歩き回った。

その時私は、携帯を2台持っていた。一般に「ガラケー」と呼ばれるauの携帯電話と、softbankのiPhone（スマートフォン）である。地震の直後から必死に誰かに連絡をとろうとしたが、iPhoneの方は電話・メール・インターネット全てが使いものにならなかった。auの携帯は電話・メールは使えないものの、インターネットにはアクセスできた。この時絶えずアクセスしていた「Twitter」が、唯一の「ソト」との連絡手段であった。Twitter経由で少しずつ友人と連絡をとり、情報もらい、震災直後の避難所に関するデマに振り回されながらも（避難所として開放されていると噂が流れた場所を5ヶ所まわったが、実際どこも開放しておらず、そこで一晩過ごすことを拒否された）、現在の東京の状況をつかんでいった。

15時頃から23時頃まで8時間歩き回った末に見つけた四谷小学校（東京都新宿区）の避難所では、ずっとラジオが流れていた。中央区のコミュニティFM局、「RADIO CITY」（正式名称「中央エフエム」）だった。東京メトロの運行状況といった交通情報や、帰宅困難者を励ますメッセージを流し続けていた。「避難している人も、少しでも安らかに眠れますように」とヒーリング音楽を流している時間もあった。その他リスナーから情報をもらい、民間で開放している店なども紹介していた。

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

ラジオをぼんやり聴いていて一番印象に残ったことは、最初の地震やそれ以降の余震で破裂した、このラジオ放送の可聴地域内のガス管の情報を絶えず流していたことである。四谷小付近にもガス管が破裂した箇所があり、「屋外にでないようにしてください」と注意を喚起されていた。2時頃に「もう大丈夫なので、安心してお眠りください」と聴いた時には、そこまで不安に感じていなかったものの、「ほっ」と胸をなでおろしたのを覚えている。夜中、何度も緊急地震速報が流れ、その度に運動場と体育館を往復しながら朝を迎えた。そして早朝に運航開始していた新幹線に乗り、大阪に帰ることができた。

あの一日で、常に外部とつながっているありがたみや情報を得ることの大切さ、そして「私」と「ソト」をつないでくれるTwitterを始めとするソーシャルメディアと、電波が届く場所に絶えず声と情報を流し続けたラジオ、とりわけコミュニティFM放送の有用性に気付いた。地域に根ざしたきめ細やかな情報発信、それができるのはマスメディアではなく、コミュニティ¹⁾メディアだ。そこで、本稿ではコミュニティFMの役割に注目し、最新新たに見られる放送の、その可能性について取り上げる。

その「新たに見られる放送」とは、この東日本大震災発生後に注目された「Radiko」²⁾に代表される「サイマル放送」³⁾である。このサイマル放送が実施されることで、一地方にあるラジオ局の放送を、電波放送特有の地域制限をこえ、他の地域でも聴取できるようになった。ここで特に言及したいのは、もともと地域に寄り添った放送、その地域に特化した放送を実施する目的で開局しているコミュニティFMが、事実上日本全国、全世界で聴けるようになっていくという「矛盾」である。

そしてサイマル放送の実施により、コミュニティFMの本来の可聴地域（一般には、放送拠点からおよそ半径20km圏内といわれている）の「ソト」に住む人々が「ウチ」の放送を聴き、つながるという現象が見られるようになった。この「ウチ」と「ソト」をつなげているものは何か。なぜつながるのか。これらの問いを、「コミュニティFM＝地域性」という観点だけにとらわれず、ストリーミング放送⁴⁾・サイマル放送を実施することで地域性から離れたメ

ディアになりつつある事例をもとに、地域性以外のアイデンティティを抱える人々の共同体、「テーマ・コミュニティ」という視点から考察していく。

そしてこのように「ウチ」と「ソト」を簡単につなぐことができるようになったのは、サイマル放送の中身を考えれば分かるように、インターネットが発展したためである。サイマル放送の実施による地域をこえたつながりから、インターネットの発展による地域をこえた動き、「トランスローカル」の発生について論じる。これが本稿のねらいである。

本稿執筆のための研究には、文献以外に、第2章の兵庫県神戸市長田区のコミュニティFM局「FMわいわい」の事例では2010年8月から実施し続けているフィールドワーク、それに基づくインタビュー、第3章の北海道沙流郡平取町二風谷のコミュニティFM局「FMビバウシ」の事例では第1回から最新の放送までの放送内容分析、現地でのインタビュー、第4章では2011年3月11日から9月11日までの新聞記事検索を用いている。

最後に、「ウチ」・「ソト」に何が当てはまるかはその場合によって異なる。東日本大震災では「ウチ」は被災地であり、「ソト」は被災地以外の地域を指すことができる。それ以外の平常時では、先述したように「ウチ」はコミュニティFMの可聴地域であり、「ソト」はそれ以外の地域であろう。それ以外にも様々な「ウチ」と「ソト」が存在する。以上の理由から本稿では「ウチ」、「ソト」とカギカッコを付けて記述していく。

1 今までの先行研究と問題点、これからの可能性

1-1 コミュニティFMとは

本節ではコミュニティFM放送についての基本的な知識をまとめる。

コミュニティFMとは1992年に制度化された、超短波放送(FM)用周波数(VHF76.0～90.0MHz)を使用する放送のことである。電波の最大出力は20Wまでと決まっている。

FMを使用する一般放送事業者は「県域放送」（「FM802」や「FM OSAKA」などを指し、現在「商業ラジオ」や「民放ラジオ」と呼ばれている放送局）

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

と「コミュニティ放送」に区分されているが、コミュニティFMは後者の免許を取得している放送局であり、市区町村に対する放送を主に行う。

設立基準の規制緩和が進み、法人格を有する事業者（規模の大小は問わない）のほか、組合・NPO法人などといった団体でも開局でき、NPO法人が運営しているコミュニティFM局は2011年12月12日現在、19局存在している。放送義務は小規模事業者でも運営ができるよう、県域放送に比べ緩やかになっている。開局するためには各地区総合通信局の無線局免許が必要である。

2011年4月1日現在全国に246局存在しており、各都道府県平均で5.2局である。しかし2011年3月11日に発生した東日本大震災の発生に伴う臨時災害放送局³⁾の林立で、12月末現在ではさらに増えていると推測される。

以上のように、コミュニティFM局とその他のラジオ局で区別しているのは電波出力のみであり、可聴範囲の区切りでしかない。それ以外の定義が存在していないのが現状である。つまりコミュニティFMという概念は、「コミュニティ＝地域性」ということでしか考えられていない。基本市区町村に向けての放送になっているが、山や建造物の関係で、とある市区町村全てで放送を聴取できるとは限らない。またその逆で、その市区町村以外で聴取できることもある。

1-2 コミュニティFMと災害報道—情報発信の手段として—

コミュニティFMという放送形態が認められたのは1992年からである。本節ではコミュニティFM放送が普及する過程について、特にコミュニティFMが注目される契機となった阪神淡路大震災やそれ以降の災害報道について、先行研究を基に考察していく。

●1995年の阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災発生当時、関西のコミュニティFM局は「エフエムもりぐち」（大阪府守口市）のみであった。「エフエムもりぐち」は地域の防災情報発信を目的に開局しており、震災が発生すると、

混乱する守口市民への情報提供に努めた。消防局から寄せられた「市内に被害はない」という情報をいち早く放送し、鉄道の運行情報、市内から被災地への救援活動についての情報なども提供した。

また、兵庫県の県域放送局（民放ラジオ）「Kiss-FM KOBE」は英語による情報提供を実施した。しかし英語以外で発信するメディアが存在しなかった。

そこで、元々在日外国人が多く住んでいた神戸市長田区に1995年1月30日、在日朝鮮・韓国人向けに朝鮮語をベースとしたミニFM⁶⁾「FMヨボセヨ」が開設される。また1995年4月16日には、ベトナム語・タガログ語・スペイン語・英語と日本語で番組を提供するミニFM、「FMユーメン」が開設され、神戸市内では多言語で災害関連情報を聴取できるようになった。1996年1月には「FMヨボセヨ」と「FMユーメン」は完全に統合し、コミュニティラジオ局「FMわいわい」となった。

ヨボセヨとユーメンという長田区のミニFMが、やがて「FMわいわい」というコミュニティFM開局へと続いていったことや、震災後のコミュニティFM開局数が激増していることも、それを裏付けている。これらのことが、コミュニティFMを災害との関係が強いメディアとして認識する背景と言えるであろう（坂田2005、216頁）。

この阪神・淡路大震災時の災害報道、災害関連情報の発信が注目されたことをきっかけに、コミュニティFM局が発足する事例が急増した。その前例として、「FMわいわい」が多分に貢献したのは言うまでもない。阪神・淡路大震災発生後3年間で、22局から120局近くにまで増加した。

●阪神大震災以降のコミュニティFMの活躍

2004年7月の集中豪雨と10月の新潟県中越地震と短期間に二度の災害に見舞われた新潟県下のコミュニティFM局は、それぞれの場面で地域に必要な情報を提供した。コミュニティFM局「FMながおか」（新潟県長岡市）は、地震発生直後から災害緊急放送に切りかえ、安否確認やライフライン情報、

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

避難所の情報や銭湯の営業情報、時刻案内（時計を持たずに非難している人のため）など行った。10月27日からは長岡市臨時災害対策用FM放送局として総務局から三ヶ月間の免許（コミュニティ放送で規定されている範囲よりも広域に放送するための特別免許）を受け、普段の20Wから50Wへ増出力された。また「FMわいわい」との連携で被災地に居住する外国人向けの情報提供が行われた（11月2日から長岡市・小千谷市・十日町市など4市4町を対象に、毎夕方2回程度支援情報や生活情報をポルトガル語・スペイン語・中国語・タガログ語の4か国語で放送）。

言語の壁を取り払う目的で設立された「FMわいわい」は、長田区という地理的な「地域」だけでなく、外国語を母国語とする人びとが暮らす遠く離れた被災地も、意識的な「地域」として捉えているのである（坂田 2005、217頁）。

2010年10月の奄美豪雨では災害当初、災害孤立地域と通信できてない状況であった。そこで「奄美エフエム」が10月20日昼ごろから10月24日まで24時間態勢の生放送に体制を切り替え、被災情報や交通・行政情報を随時放送し、かつリスナーからの要望で安否情報をメッセージ放送した。この放送により安否確認が取れた被災者も多かったといわれている。特にこの事例では、災害によって交通手段や固定・無線の通信手段が破壊されても、コミュニティFM放送による情報伝達が有効であることが実証された。

NHKとコミュニティFMの双方に共通するのは、日常における地域あるいは地域の人々との繋がりである。実際、平時におけるコミュニティFMの存在は、ローカルで小規模なFMラジオ局としてである。それが、ひとたび災害が起こると、地域に密着したきめ細かい情報を提供する地域メディアとして、にわかにクローズアップされる（坂田 2005、218頁）。

コミュニティFMには、自分たちが生活している地域のどんな些細な情報も伝えてくれると

いう安心感だけでなく、みんなで共有しているという一体感もある（坂田 2005、222頁）。

以上のことから阪神・淡路大震災から様々な災害を経て、コミュニティFMは災害時に有用なメディアの一つとして注目されるようになった。今回の東日本大震災においても、マスメディアでは取り上げきれない細やかな地域の災害関連情報を発信するという役割が注目されている。

しかし絶えず災害が起こっている訳ではない。災害報道ばかりにフォーカスをあてるのは偏向的である。災害時のコミュニティFMの有用性に関して多くの論文が見つかるが、平常時のコミュニティFMの可能性や役割について事例を交えて細かく言及されている文献は見つからない。これが今までのコミュニティFM関連の研究の問題点であり、かつ本節で取り上げられている坂田の文献で指摘すべき問題点ではなかろうか。

平常時はどのような目的で活動しているのか。第2章、第3章ではこの「平常時」の役割にフォーカスを当てて論じていきたい。

1-3 「ローカル・コミュニティ」と「テーマ・コミュニティ」

坂田謙司の論文「コミュニティFMによるインターネット放送—インターネット時代における地域メディアの新しい展開—」（『マス・コミュニケーション研究』62、日本マス・コミュニケーション学会、2003年）ではコミュニティFMが放送する内容は主にローカル・コミュニティに向けたものとテーマコミュニティに向けたものの2つに分けることができる、と主張されている。

地域社会には行政単位や古くから受け継がれている土地同士の結びつきという「地域性」に基づく範囲と、「共感」や「情報」などによって結びついた「共同性」に基づく範囲がある。前者を「ローカル・コミュニティ」、後者を「テーマ・コミュニティ」と呼ぶならば、コミュニティFMは一定の「ローカル・コミュニティ」を電波でカバーする地域メディアとなり、さまざま

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

な「テーマ・コミュニティ」をカバーする地域メディアともなる。コミュニティFMの「コミュニティ」には、前提としてそうした二重性が含まれているのである（坂田 2003、136頁）。

以上の考察を踏まえ、坂田は北海道にあるコミュニティFM8局に聞き取り調査を実施。「地域密着を自らの理念として掲げるコミュニティFM局は、どのような意識の下に地理的な限定のないインターネット放送を行っているのか。また、インターネット放送は「誰」に向けて行われ、その「彼ら」はどのような反応を返しているのか」という点について主に調査した。調査結果は「その地を既に離れた人が、その地の情報収集をすることと、懐かしみながら聴いてもらうことを主な目的としてストリーミング放送を行っており、実際そういった目的で放送を聴いた、という反応が多く返ってきている」というものであり、ローカル・コミュニティを重視したものが大半であった、と記述されている。

しかしこれら調査対象だった北海道のコミュニティFM8局である「テーマ・コミュニティ」向けに放送されているものは、北海道札幌市にある放送局の「ゲイ・コミュニティ」向けの番組しかなかったと論文内でも指摘されており、「テーマ・コミュニティ」に対して放送することを主な目的としている放送局が、どのようにストリーミング放送・サイマル放送を行っているのかについて言及されていない。

私はこの点に着目し、特定のテーマ・コミュニティに対し情報を発信する為に作られたコミュニティFM局が、地域メディアとしての特質を持ちながら誰に向けたストリーミング放送を行ったのか、また特にローカルの枠を超えやすいテーマ・コミュニティに向けた配信のためにインターネットがどう使われていったのかを第2節の内容も踏まえ、考察していく。以下「ローカル・コミュニティ」、「テーマ・コミュニティ」という2つの言葉を、上記引用部分の定義のまま、使用することとする。

1-4 サイマル放送の開始によって芽生えた、コミュニティFMの新たな可能性—情報発信の手段から「つながる」メディアへ—

前節で取り上げた坂田の論文内に書かれているのは、2003年に執筆されたということも関係しているが、あくまでストリーミング放送におけるものである。ストリーミング放送自体は前章の注で説明した通り、各コミュニティFM局が独自に放送を実施しているものであり、「サイマルラジオ」や「Radiko」といったサービスは存在していなかった。このことから、サイマル放送が始まることによってまた別の性質が見えるのではないかと考え、本節では本稿の重要部分であるサイマル放送の開始とその流れについて記述していく。

2005年4月1日、「SimulRadio（現「サイマルラジオ」）」というサービスの試験運用が開始された。これはコミュニティFM放送をサイマル配信（電波で発信していたものに加え、インターネットにアクセスすることで放送を受信できるようにする配信方法）するというサービスであり、パソコンであれば「サイマルラジオ」にアクセスし、聴きたいラジオ局を選択するだけで、携帯電話（主にスマートフォン）であればアプリケーション「コミュニティFM for iPhone」 または「SimulRadio for Android」「TuneIn Radio」をダウンロード後、起動して聴きたいラジオ局を選択することで簡単に、かつクリアな音質で聴けるようになった。ただパソコンから聴く場合、「Windows Media Player」（音楽ソフト）が必要である。2011年11月現在89局がこの「サイマルラジオ」によるサイマル放送に参加している。

コミュニティFMは電波の出力が弱いため、聴取可能地域においても住居の高層化や市町村合併等の理由で場所によっては聴取できない場合があり、そのことによる災害時などの情報格差を解消すること自体が「サイマルラジオ」開始の理由である。しかしこの開始により、サイマル放送を実施するラジオ局が急増し、かつ「サイマルラジオ」は全国に限らず全世界へ配信しているため、地域に寄り添って放送している多くのコミュニティFMが全世界で聴取可能という状況を作り上げた。

以上、コミュニティFMに関する概要と先行研究、

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

今後の可能性について記述してきた。それらを総合し、次章からは地域に寄り添った放送を行っているコミュニティFMが、サイマル放送を実施し世界中で放送を聴取できる状況になったことでその地域以外の地域とどのようにつながったのかを、「平常時」と「災害時」に分け、「テーマ・コミュニティ」に対する放送、という視点を意識しつつ、それぞれ考察していく。

2 「テーマ・コミュニティ」とストーリーミング放送—神戸市長田区・FMわいわいの場合—

2-1 FMわいわいとは

FMわいわいは、兵庫県神戸市長田区海運町にある、NPO法人エフエムわいわいが運営するコミュニティFM局の名称である。可聴範囲は、神戸市長田区、須磨区の一部、中央区の一部である。

1995年、阪神・淡路大震災発生時に、言語の壁によって十分に情報を得ることができない在日外国人に対して複数の言語で海賊放送を行ったミニFM局「FMヨボセヨ」と「FMユーメン」が統合され、1996年1月17日に開局された。以上の経緯から「災害報道」、「多言語放送」という点を強く意識しており、阪神・淡路大震災以降の災害においては、被災地のコミュニティFM局に対しては日本に限らず積極的に技術支援を行っている（海外に対する支援の例として、2010年のハイチ大地震の事例が挙げられる）。

コミュニティ放送局の役割は「地域密着」「防災・災害」だけで語られるものではない。地域の要望に応え、社会の変化を促すことにより、地域の発展に貢献するような放送局こそが、マスメディアが果たしえないコミュニティのためのラジオ放送」なのではないだろうか（日比野2007、52頁）。

上記のように、FMわいわいの代表である日比野純一氏は今までのコミュニティFMの研究で取り上げられてきた「地域に寄り添った放送」、「災害報道」（第1章参照）だけがコミュニティFMの役割では

ないとし、その地域内の問題（主にマイノリティ⁷⁾に関するもの）に取り組み、それを日本全国、世界中に広く問いかけ、発信することでより良い地域を作ることを目指しており、その実践手段としてのコミュニティFMだと捉えている。

現在、FMわいわいでは日本語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、ベトナム語、タガログ語、タイ語、英語、韓国・朝鮮語、アイヌ語による多言語放送を実施している（計10言語）。番組では主に本国のニュースや今の流行などを基本「母語」で話している。もちろん神戸・長田の情報も母語で話している（祭・イベント情報、在日外国人コミュニティ内の情報など）。

その他『桂福点のお気楽島ラジオ』、『ふれてあれこれ好奇心アイtoアイズ』など、障がい者自身がパーソナリティの番組も複数存在する。

タイムテーブル上では、午前～昼が長田の地域情報（『まちはイキイキきらめきタイム』、『KOBEながたスクランブル』）、昼以降はトーク番組、夕方からは多言語放送といった構成になっている。

2-2 ストーリーミング放送の発展による、番組の変化と「テーマ・コミュニティ」

FMわいわい総合プロデューサー金千秋氏、同代表日比野純一氏へインタビューを実施した。FMわいわいは1998年から「Real Player」という映像用ソフトを使ってストーリーミング放送を実施していることから、放送初期の1995年から1997年まで、独自にストーリーミング放送を実施してきた1998年から2005年まで、そして「サイマルラジオ」に参加し、サイマル放送にシフトした2006年以降の3つに分け、それぞれの時期での放送内容と違い、とりわけサイマル放送を実施してどのような放送をしているのかについて聞いた。結果、以下のような事例が明らかになった。

《事例1》

『SALSA LATINA』（毎週水曜20時から放送されている、スペイン語の情報番組。もともとは長田の情報や日本のニュース（新聞記事）をスペイン語に翻訳して伝える番組だった）

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

集会の情報など全国各地のラテンコミュニティに向けた情報発信などが行われている。スペインなどのニュースを母語で発信している。

《事例2》

『Pinoy Rap』（タガログ語の情報番組。もともとの内容は《事例1》と同様）

《事例1》の内容の実施以外にも、以下のことが挙げられる。

マイノリティーの視点に立つ活動団体のネットワーク作りを支援する神戸市長田区のNPO法人「たかとりコミュニティセンター」に10月下旬、宮城県気仙沼市で東日本大震災で被災したフィリピン出身の伊藤チャリトさん（37）と高橋レイシエルさん（41）が研修に訪れた。外国人向けのラジオ番組制作を学ぶとともに、同センターが多角的に取り組む「多文化が共生するコミュニティづくり」に触れ、地元気仙沼でも根付かせ、花開かせようと意欲を見せていた。……（中略）……

4月下旬に支援で気仙沼市を訪れた同センター常務理事の吉富志津代さん（54）らが、ラジオ番組づくりを提案した。災害を体験した外国人被災者が、母国の言葉で情報発信しようというのだ。「最初は驚いた」という伊藤さんらだったが「経験を自分たちの言葉で伝えたい」と賛同した。

6月上旬、伊藤さんの自宅居間にフィリピン出身の女性計6人が集まり、タガログ語で震災体験を語る1時間のラジオ番組を作った。……（中略）……

被災外国人のためのラジオ放送として反響を呼び、多くのマスメディアにも取り上げられた。「すばらしい。もっと続けてくれ」とリスナーから声が上がリ、フィリピン本国からも継続を求めるメッセージが寄せられたという。反響を受け、今は救援物資の仕分けなど、震災後の活動を発信しようと新たな番組制作に取り組んでいる（「防災 明日に備える 外国人被災者が情

報発信」、『毎日新聞』2011年11月6日付朝刊・兵庫版）。

上記記事で取り上げられているラジオ番組は、インターネットを通して被災地のコミュニティFM局に配信された。同時にサイマル放送を利用し、『Pinoy Rap』でも生放送という形で放送された。

「1998年からのストリーミング放送、または2006年からのサイマル放送を実施してから、特にテーマ性を持った放送に関しては、電波が届く神戸市長田区だけではなく、それ以外の土地にも目を向けたものにしつつある」とFMわいわい総合プロデューサー金氏、代表日比野氏共に語っている。FMわいわいが独自に実施したストリーミング放送よりも、「サイマルラジオ」に参加してサイマル放送を実施することでインターネットから番組を聴取する人が増えたという。それは手紙やメールの数でもよく分かるそうだ。この「サイマルラジオ」に参加してから番組制作の意識が急速に変わっていった、とも金氏、日々野氏共に語っている。

リスナーの反応については、1998年のストリーミング放送、そして2006年のサイマル放送を開始することによって海外に住む方々（日本人ではなく、アメリカ人・オーストラリア人・中国人など）からのメールが増加し、年に50件ほど来るという。彼らが放送を聴く理由は、「もともと日本に関心があり、私たちが話す母語で日本の情報が聴けるから」というものが多いという。日本国内においては、特に多言語放送に対しては全国各地の在日外国人コミュニティからメールが送られてくるようになった（特に《事例2》の例が顕著）。

FMわいわいの放送に一貫して感じられるのは、「マイノリティー」に対する強いまなざしである。多言語放送や障がい者向けの番組というのは、長田区内の特色、「地域性」を表したものであるが、その結果として「テーマ性」を強調した放送をしているという事実には、地域に寄り添うコミュニティFMが単にその地域に向けて放送するだけでなく、サイマル放送などの手段を使い、地域をこえて発信してい

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

く意義を強く感じさせる。

また放送や放送局自体の方向性に、「痛みを分かちあう」という思いが感じられる。この思い、共感が、第1章第3節の坂田氏の文献の引用から分かるように、「ローカル・コミュニティ」の話だけにとどまらず、「テーマ・コミュニティ」に対する放送、そして「テーマ・コミュニティ」同士のつながりを加速させているのではないか。

そしてさらに注目すべき点として、「長田から世界へ」というFMわいわいのスローガンがある。なぜ日本に住む在日外国人への発信が主な目的なのに「世界へ」なのだろうと私自身、不思議に思ったことを覚えている。しかしハイチ大地震発生時に技術支援した事例や上記の事例などを踏まえると、FMわいわいはそもそも「長田へ」・「長田以外の日本へ」・「世界へ」という3つの視点を持ちながら放送を実施していることが分かる。それを実現させたのはかつてのストーリーミング放送であり、サイマル放送である。FMわいわいが早い時期からストーリーミング放送に取り組んでいた理由が、この特殊性からうかがえる。

そして、このFMわいわい自体の特殊な放送目的から、FMわいわいはこのストーリーミング放送・サイマル放送を合理的、意図的に使用していると考えられる。つまり上記の事例（つながり）もほぼ意図的なものであり、リスナー自体も「つながりたい」と思って意図してFMわいわいのサイマル放送を利用しているといえないだろうか。

しかし次章でとりあげるFMピパウシの事例にはラジオらしい、「意図しないコミュニケーションの形、つながり」が見られる。次章ではその点も含め、考察していきたい。

3 「テーマ・コミュニティ」とサイマル放送—北海道二風谷・FMピパウシの場合—

本章では、第1章における坂田の論文に反論する形で、「アイヌ」というテーマ性を持ち、「アイヌ民族自身による放送」を目指して設立された北海道・二風谷に存在するFMピパウシ（エフエム二風谷放送）というコミュニティFM局が、二風谷という地

域に向けた放送を行いつつ、インターネット放送やサイマル放送の実施によって番組の内容が変化し、「アイヌ文化の発信」というテーマ性に重きをおいた放送内容になりつつあることを検証し、この「テーマ・コミュニティ」への放送から「二風谷のアイヌの人々」と「二風谷以外のアイヌの人々」という「ウチ」と「ソト」のつながり、そして「アイヌの人々」と「そうでない人々」との「ウチ」と「ソト」のつながりの存在について考察する。

これらの考察にあたり、2011年11月13日（日）にFMピパウシに伺い、編成局長である萱野志朗氏にインタビューを実施した。以下「萱野氏が語っていた」という部分は、インタビューからの抜粋である。

3-1 FMピパウシとは

FMピパウシは、北海道沙流郡平取町二風谷^{きふたに}に存在する、同地域の一部を放送エリアとする日本語とアイヌ語によるコミュニティFM局である。正式名称は「エフエム二風谷放送」である。「FMピパウシ」とはラジオ局の愛称であり、かつエフエム二風谷放送が毎月1回放送する番組の名称でもある。

FMピパウシはアイヌ初の国会議員で二風谷アイヌ資料館前館長であった故・萱野茂氏⁸⁾が2001年4月8日に設立した。ピパウシとはアイヌ語で「貝のあるところ」という意味であり、平取町二風谷の古い地名からつけられた。アイヌ語を母語として育った最も若い世代に属する萱野茂氏は1990年ごろ、話す人が減ったことで消えつつあったアイヌ語を後世に残そうと、二風谷で道内初のアイヌ語教室を開いた。その後、教室は道内十数カ所に広がったが、若者に普及しないことから「アイヌ民族自身によるラジオ放送を実現し、発信したい」と切望し、FMピパウシを設立した。

FMピパウシの放送は、毎月第2日曜日の午前11時から正午までの1時間、二風谷こども図書館内の臨時スタジオから放送される⁹⁾。毎月1時間だけの放送であり、FMわいわいによる同時中継（サイマル放送）の他、放送日時は違うがFM e-niwa（北海道恵庭市）、FM WING（同帯広市）でも放送されている（共に2011年から）。

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

放送内容の例として、2011年9月11日放送の第125回を取り上げる。以下の図のような構成であった。

●第125回（2011/9/11）放送内容

- ・オープニング「ヤイト°レンベコイキ」
- ・地域のニュース
 - (1) 娘が眠る海守る 紋別の畠山さん 2011年9月8日『北海道新聞』夕刊
 - (2) 本で知る大震災 平取 2011年9月9日『北海道新聞』
 - (3) サケ豊漁を祈願 千歳川 2011年9月5日『北海道新聞』
 - (4) 別海地方のアイヌ語を和訳 旭川アイヌ語研究会 2011年9月6日『北海道新聞』
- ・わいわいがやがや テーマ：「鮭（シャケ）」について
- ・「萱野茂二風谷アイヌ資料館」からのお知らせ
- ・インタビューコーナー ゲスト：森岡健治さん（沙流川歴史館 学芸員：平取町教育委員会文化財課埋蔵文化財係 主幹兼係長）
- ・ペルーとボリビアの報告 8月11～26日
- ・新コーナー：「ピリカ カンピソシ」（良い本）の紹介NO.2『北海道の地名』（山田秀三著・北海道新聞社）
- ・エンディング

放送当初は二風谷小学校の新1年生の紹介や、町報の内容を紹介するなど、「平取町二風谷」という地域に重きをおいた放送をしていた。上記以外に「迷い犬の情報や、二風谷のとある所にできたスズメバチの巣について注意を喚起したり、買い物情報などを流していた」とFMピバウシ編成局長・萱野志朗氏（以下萱野志朗氏）は語っていた。

その他ユカラの放送や「アイヌ語一口会話」、「アイヌ語早口言葉グランプリ」などアイヌ文化の発信もしっかり行っている。地域性とテーマ性、どちらにも偏らないバランスをとった放送のように感じる。

2005年頃から放送内容に少し変化が見られるようになる。「アイヌ語ワンポイントレッスン¹⁰⁾や本

の朗読コーナーは、アイヌ文化を知らないリスナーに対して「アイヌ文化を知ってもらおう」という思いから始めたコーナーだった」と萱野志朗氏は語っていた。ちょうどこの時期（2005年4月）から「さっぽろ村ラジオ」（北海道札幌市）と、2007年4月からはFMわいわいとサイマル中継を始めており、関連があるのではないかと考えられる。

また、この時期以降「地域のニュース」はアイヌ全体に関するものであり、かつメッセージ性が強いもの（『北海道新聞』の社説）も取り上げるようになった。「アイヌ」というテーマ性にだんだんと重きをおいていると推測される。

今回の例（第125回放送）では、放送初期にあった二風谷関連のニュースがほぼ消滅している代わりに、アイヌ関連の、テーマ性をもったニュース・企画が増加していることが分かる。これは放送対象が、二風谷に住んでいるアイヌの人々から二風谷以外に住んでいるアイヌ以外の人々、そしてアイヌを知らない人々にまで広がってきているからであろう。

3-2 アイヌというマイノリティとしての存在と、「テーマ・コミュニティ」

萱野氏にインタビューしたところ、以下のことが明らかになった。

FMピバウシへの便りは、年に6通から10通は届くという。二風谷以外から便りが来るのがほとんどである。FMピバウシへ届く手紙・メールの内容は、「アイヌ文化について全く知らなかったが、「たまたま」放送を聴いて（二風谷の土産物屋で、インターネットでFMピバウシのサイトを発見して、FMわいわいの放送を聴いて）この番組を知った。アイヌについて知る良い機会になっている」というものが多いそうだ。一度耳にすると、ずっと聴いてくれる、気にかけてくれる人が多いという。これはアイヌという強い「テーマ性」が絡んでいるからだといえる。そして第1章の先行研究で取り上げた、そこが故郷だった人がかつての故郷の情報を懐かしみながら聴く、ということ以外のリスナーの思いが窺える。

インターネットを使わなくとも聴取できる二風谷の人々との交流についても聞いた。二風谷の人にも

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

聴いてもらっている実感はあるが、二風谷以外の人からほどの実感はない（数は少ない）。二風谷にはアイヌ民芸の店が多く、その店で流してもらっているので、番組の感想とかを言ってくれる人もいます。放送初期は特に地域の小学校と協力して（コーナー「二風谷小学校だより」など）放送していたが、今では関係は薄いようだ。むしろ二風谷以外の小学校との付き合いが多く、相手側からアイヌ関連の情報を提供してくれることが多いという。

3-3 FMわいわいの放送との比較

私自身、サイマル放送により、地域をこえたアイヌ人コミュニティ同士の交流（北海道・二風谷と北海道内のその他の地区、そして樺太周辺のアイヌコミュニティなど）の例があると期待してインタビューを行ったが、その例は存在しなかった。その理由として、それらコミュニティをつなぐ言語はアイヌ語であるが、アイヌ語を完全に話し、聞きとることのできる話者はごく少数しかいないこと¹¹⁾が理由の一つとして考えられるのではないだろうか。

第3章第1節でも触れたが、FMビバウシの放送を開始する前、萱野茂氏が「アイヌ民族自身によるラジオ放送を実現したい」とする中で、消えつつあったアイヌ語を後世に残すことを考えた結果、ひたすらアイヌ語を放送し続けることも考えたという。しかし実際はアイヌ語の話者が少なく、実際アイヌ語を聴きとれない人が多すぎることを意味することから断念し、日本語による放送を始めた、と萱野志朗氏はインタビューで語っていた。このことも、アイヌ語が消えつつある現実がアイヌ人コミュニティ同士のつながりを阻害していることを表している。

第2章で取り上げたFMわいわいの多言語放送と比較して、この「言語」がつながりにおいて強い要素を持っているのではないかと考える。「在日外国人」というテーマ性をもった多言語放送では、別の地域に住む同コミュニティ（例：ラテンコミュニティ）の人々に対して、母語（例：ラテン系言語）を用い、発信することを最重要視している。リスナーもその母語を聴き、話せる人たちであることから、違う地域に住む同じルーツを持ったコミュニティ同

士が放送を聴き、交流するという要素が強い。FMビバウシの場合は、アイヌの人にも情報源として聴いてもらうことを意図しつつ、アイヌのことを知らない人に聴いてもらい、アイヌ民族自体やアイヌ文化について知ってもらうことをも目的としている。アイヌが「マイノリティ」であり、かつその文化自体が知られていない現状が「発信」という要素を強くさせている。しかしアイヌという強いテーマがあることから「マイノリティの当事者／そうでない人たち」という、第2章のFMわいわいとは違うつながりを形成していることが分かった。

そしてそのつながりには、多くの「意図しないコミュニケーション」が潜んでおり、「店でふと耳にする」、「車の中で聞き流している時にふと耳にする」といった聴取の偶然性に満ちている。ここもFMわいわいの主な違いとして指摘すべき部分であろう。FMわいわい（多言語放送）は、サイマル放送とそれによる番組を意図的に用いている（第2章第2節参照）。そしてリスナーもその多言語放送を半ば意図的に、つながりを感じたくて聴取しているはずである。それに対しFMビバウシはアイヌを知らない人を対象にしているため、偶然聴取することを頼りにするしかない。しかしこの聴取の偶然性こそラジオ放送自体の特性であろう。FMビバウシの事例にはラジオ本来の魅力を感じずにはいられない。

地域に基づきつつも、「アイヌ」というテーマを、地域をこえ発信し続ける。そして私たちは、北海道二風谷というアイヌコミュニティの声を聴き、アイヌの姿を「ウチ」側から「知って」いくことができる。そこに地域をこえ、つながる「トランスローカル」の本質、さらにはそれを実現させるラジオ自体の本質があるはずである。

4 東日本大震災とサイマル放送—「トランスローカル」の事例として—

第2章・第3章では平常時におけるコミュニティFMの、サイマル放送によって生まれた「ウチ」と「ソト」のつながり、トランスローカルについて考察してきた。本章では、災害時のコミュニティFMが生み出す「ウチ」（被災地）と「ソト」（被災地以外の

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

地域）のつながりについて論じていきたい。

本稿を書くきっかけとなった、2011年3月11日に発生した東日本大震災でのコミュニティFMの活躍は、1995年に起こり、コミュニティFMが全国に普及するきっかけとなった阪神・淡路大震災や2004年の新潟県中越地震、2007年の新潟県中越沖地震、またその他の災害におけるコミュニティFMの災害報道とはまた違ったコミュニティFMの役割・意義を提示した初めての機会ではないだろうか。その役割・意義とは、被災地の「ソト」に住む私達が被災地の「ウチ」側の情報を、インターネットを用いたサイマル放送で聴き、それを支援に活用する、というものである。

本章では東日本大震災における、これらラジオのサイマル放送が作り上げたトランスローカルについて取り上げていく。

4-1 東日本大震災発生後のラジオ放送の活躍

この考察にあたり、東日本大震災という進行中の事象を取り上げるため、新聞記事検索を実施し、その記事の内容から考察していく。

記事検索は2011年3月11日から6月11日までの3ヶ月間、全国紙3紙（『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』）の記事を対象に実施した。「ラジオ」「FM」「コミュニティ」の3語で検索し、本稿に少しでも関係のありそうなものを抽出した。『朝日新聞』では4件、『読売新聞』では4件、『毎日新聞』では7件の新聞記事が目玉すべきものとして挙げることができた。それぞれの新聞記事の見出し、その内容については字数の関係上、省略する。

東日本大震災後のコミュニティFMに関する記事を考察したところ、記事の内容を二つのパターンに分けることができると考えた。

一つ目として、以下のようなものが挙げられる。

大地震と津波、それに続く全市民的な水・食料不足のなか、いわき市平のコミュニティー放送局「シーウエーブFMいわき」が連日24時間の生放送を続け、きめ細かい生活情報や安否情報を知らせて市民を支えた。復興に格差が生まれ、

変わりゆくリスナーのニーズに応えようと奮闘中だ。

地震の瞬間は東京のFM局が制作した番組を流していた。パーソナリティーの坂本美知子さん（40）が反射的にマイクを切り替え、「ただいま揺れを感じております、津波にご注意下さい」と呼びかけた。3月30日午後まで続く、休まない生放送の始まりだった。

電話が不通となったため、スタッフは生中継用の機材を市災害対策本部に持ち込み、避難所情報を放送局へ送った。津波被害がわかってくるにつれ、安部正明局長（53）は「みんなが知りたいのは肉親の安否だ」と、当日夕方から、放送で呼びかけて安否情報を流した。

200を超えるファクスやメールが届いた。海沿いの老人介護施設からは「灯油、紙おむつ、水と食料がない」と連絡が。「助けに行ける人は行ってあげて下さい」と放送すると、近所の人たちがおかゆを持って駆けつけたという。

2日後くらいからは、メールなどで届く生活情報が主になっていった。大病院やスーパーはもちろん、接骨院や個人商店などの再開予定日、営業時間を詳しく伝えた。携帯ラジオを手に避難所からガソリンスタンドへ車を走らせる人の姿もみられた。…（中略）…

現在は身元不明の遺体の特徴、放射線の学識者につてを頼って電話したインタビューなどを流す。安部さんは「復興に向かい始めた人と、家も家族も失ってそれどころではない人と。避難所の中でも格差が生じている。どんな番組が求められているのか、模索しています」と話している。」（『東日本大震災で連日24時間 市民支えた生放送 シーウエーブFMいわき』『朝日新聞』2011年4月13日付朝刊・福島版）

コミュニティFMに関する先行研究でよく言及されている、「コミュニティFMの災害報道」について取り上げたものだ。テレビや全国紙、地方紙・地域紙であっても取り上げきれないコミュニティ内の災害情報・支援情報を発信し続けたというものであり、これは阪神・淡路大震災時から注目されてきた

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

役割である。

もう一つのパターンは、以下の2つの事例が最も顕著であるので、それらの記事を例として取り上げ、考察する。

《事例1》

東日本大震災で被災した子どもたちに「本の読み聞かせ」を届けようと、児童文学作家たちが自作を朗読して収録し、インターネットを通じて被災地のラジオ局などに無償提供している。

呼びかけたのは、東京都の本間ちひろさん（33）。…（中略）…本間さんは当初、被災地に絵本を送ることも考えたが、かえって邪魔になるかもしれないと悩んでいた。そんなとき、地域FM局を運営するNPO法人「京都コミュニティ放送」（京都市）の理事で知人の松浦哲郎（てつお）さん（34）から「ラジオの電波で声を届けたい」と提案された。他の作家にも呼びかけ、6人が協力を名乗り出た。…（中略）…

作家たちは「おはなしお届け隊」というサイト（<http://ohanashi.org/>）を立ち上げ、朗読した物語を収録。被災地のラジオ局に声をかけたところ、福島市の地域FM局「エフエム・ボコ」が「使わせてほしい」と声を上げた。斎藤宏幸・放送局長は「原発事故の影響で避難生活が長引き、先行きが見えない。子どもたちの不安を少しでも和らげるため、ぜひ朗読を聴かせたい」と話す」（「児童文学作家ら、被災した子に「読み聞かせ」プレゼント 東日本大震災」『朝日新聞』2011年4月23日付夕刊・全国版）。

《事例2》

東日本大震災の発生後、コミュニティ・ラジオ局のエフエムあやべ（綾部市）が、ラジオを足がかりにした被災者支援を展開している。市民から中古ラジオを集めて被災地で配ったほか、人手不足に悩む宮城県の臨時災害放送局のために番組を作る計画も進めている。…（中略）…

今、準備を進めているのは、FMあおぞらに提供する番組製作だ。洋楽や童謡にトークを交えた内容で、両局が打ち合わせて決めた。震災からもうすぐ3カ月。今まで災害関連情報を求めていた聞き手の

ニーズが、「心のゆとりが得られる番組が聴きたい」と変化しているからだ。

災害時を含め、市民に役立つ情報を流す役割を担うコミュニティFM。井関さんは「ラジオの力を知ってもらうと同時に、私たちは災害時にすべきことを再認識した」と話している（「つながるラジオ エフエムあやべ活躍」『朝日新聞』2011年6月8日付朝刊・京都版）。

上記の2つの事例に共通しているのは、「ソト」（被災地以外の地域）の人々が「ウチ」（被災地）の人々に向けてラジオ関連のコンテンツを作り、インターネットを通して配信しているということである。

阪神・淡路大震災における被災地の「ソト」に住む人々からの支援は、主に人的支援（ボランティア活動）と物的支援（金銭的支援も含む）の二種類であった。それ以降の災害（2004年の新潟県中越地震など）においても、上記の記事のような支援の形はごく一部であり、FMわいわいが実施している外国語支援（外国語で震災情報を収録し、それを被災地のコミュニティFM局に送る）以外の例はあまり見られなかった。

東日本大震災では、今までの人的支援と物的支援という二種類の支援の形に加え、「情報的支援」も積極的に行われ、それが一般に広がっていることを確認できる初めての機会なのではないか。

そして上記の事例から、被災地の「ウチ」は被災地における情報をひたすら発信し、地域に寄り添うという役割が、被災地の「ソト」は被災地では制作する余裕のないトーク番組や癒しの一時など、エンターテインメント性の強いものを送り、被災地を和ませるという役割が明確に浮かび上がったと考える。このことも、東日本大震災発生後のコミュニティFM放送の意義として指摘すべき点であろう。

さらに特筆すべき点として、コミュニティFMが関わることで、また新たなつながり・関係が形成されている。その主な例が第2章のFMわいわいで取り上げた気仙沼のフィリピン人コミュニティの放送であるとする（第2章第2節、事例3参照）。

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

4-2 サイマル放送の発展がもたらす、トランスローカル

第1節に加え、第2節では特にサイマル放送自体にフォーカスを当て、トランスローカル現象を探っていく。その例として、以下の2例を挙げることにする。

《事例1》

コミュニティFMのサイマル放送用サイト「サイマルラジオ」にて、被災地のコミュニティFM（災害対応局）や、震災に伴い緊急開設された「臨時災害放送局」に対応し、日本全国のみならず全世界で被災地のコミュニティFMの放送を聴けるようにした。現在も聴取可能である。

《事例2》

元々関東地区・関西地区にて、それぞれの地区内のラジオ局の放送しか聴けなかった民放ラジオ（AM放送・FM放送）のサイマル放送用サービス「Radiko」が3月13日17時から各エリアの制限を解除し、関東地区・関西地区の民放ラジオ局13局の放送を日本全国から聴取可能にした（重要なのは、震災発生後すぐに東京のラジオ放送が聴け、東京の被害状況や計画停電などの情報を聴けたことである）。3月25日10時から中京地区6局のサイマル放送も開始されたが、これについてもエリア制限を設けず、全国各地で放送を聴ける状態にした。この制限解除は関西・中京地区各局は3月31日まで、関東地区各局については4月11日まで続けられた。

4月28日12時から「radiko.jp復興支援プロジェクト」という名で、主な被災地区である東北・関東4県の民放ラジオ局7局（IBC岩手放送、TBCラジオ〔宮城県〕、ラジオ福島、IBS茨城放送〔以上AM放送〕、FM岩手、Date fm〔宮城県〕、ふくしまFM〔以上FM放送〕）の放送の配信を開始。日本全国から被災地の放送を聴けるようになっている。この配信は10月31日までの予定だったが、現在2012年3月末まで期間を延長して運用されている。

《事例1》の「サイマルラジオ」の支援の目的はコミュニティFMの放送を全国で聴けるようにする

ことであり、《事例2》の「Radiko」の支援の目的は、

復興支援プロジェクトとは、風評被害からの回避の一助となるよう、地域密着度の高いラジオ情報を通して、被災地区の現状を日本全国へ正確に届けること、かつ、ふるさとから避難されている方々に、ふるさとの様子を伝えることを目的とし（サイト「radiko.jp復興プロジェクト」〔<http://fukkou.radiko.jp/>〕より。2012年1月2日閲覧）

とあるようにそれぞれに違いはあるが、大事なのはこれらの事例により被災地の「ソト」の人間でも被災地の「ウチ」側の放送を聴けるようになったということである。災害時にサイマル放送が活用され、簡単に被災地の情報を全国各地で聴けるようになった初めての機会である。このことにより、今までよりも被災地の「ウチ」側の出来事が地域をこえ、より大きな事象になっているのではないだろうか。そしてこのことで幅広い支援に結び付けることができ、第1節の事例やつながりの加速にもつながったと推測される。

以上、本章では東日本大震災時のラジオ放送と、そのサイマル放送の活躍についてそれぞれ検討してきた。東日本大震災は「トランスローカル」を説明する良い例なのではないか。

おわりに

第2章から第3章にかけては「在日外国人」「アイヌ」といったテーマ性をもったコミュニティFM局がインターネットを用いたサイマル放送を実施することで、元々は限定された地域（放送局からおおよそ半径20km圏内）にしか発信できなかった情報が日本中、世界中で聴けるようになったことによる、地域性をこえた「ウチ」と「ソト」のつながり、トランスローカルについて「平常時」にフォーカスを当て、考察した。

第2章では、「長田から世界へ」をスローガンに情報を発信しているFMわいわいが、元は長田に多く住んでいる在日外国人に対して情報を提供する目

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

的で多言語放送を実施していたものが、サイマル放送を実施し、全国各地の在日外国人コミュニティ（ラテン系の人々やフィリピン人の人々など）とつながり合う結果となったこと（「ウチ」は神戸市長田区、「ソト」は長田以外に存在する在日外国人コミュニティなどを指す）、そして海外在住の外国人（日本人ではない）がその多言語放送を聴き、日本の情報に触れているという事例（この場合「ウチ」は長田、「ソト」は海外の国々を指す）まで存在することが分かった。

第3章では「ウチ」（アイヌ）と「ソト」（アイヌではない人々）のつながりの形がうかがえた。言語の壁や、アイヌ文化自体が一般に浸透していないことがその関係性（アイヌコミュニティ同士のつながり）や発信の目的に多分に影響を与えており、第2章のFMわいわいの事例とは違う側面のトランスローカルを考察する事ができた。

特にFMピパウシの事例では「意図されていないコミュニケーション」が多く見られた。それは、北海道・二風谷にあるアイヌ民芸品の店に行った際にたまたま放送を聴き、アイヌに興味を示す、知る、といったことから始まるつながりというものである。後に考察するが、これこそがラジオ放送の特性の一つであると感じる。

第4章では、コミュニティFMに関する研究がよくなされている「災害時」にフォーカスを当て、2011年3月11日に発生した東日本大震災発生後のラジオのサイマル放送と、それによる「ウチ」（被災地）と「ソト」（被災地以外の地域）のつながり、トランスローカルについて考察したが、この考察によって、東日本大震災の特殊性（今まで見られなかった支援、トランスローカル）が浮かびあがった。これらの特殊性は、2011年1月から勃発した、「アラブの春」で見られたトランスローカルの姿なくしては語れない。

粉川哲夫・杉村昌昭「携帯革命はどこへ行く」（『インパクション』179、インパクト出版会、2011）では「トランスローカル」と「携帯革命」について取り上げている。

ネットが有力な機能を発揮したのも、そうし

た動きが、イデオロギーや信仰による「融溶集団」によってではなく、バラバラの個人が距離（内的・外的／心的・身体的）距離を保ちながらネットワーク的、しかもトランスローカルにつながった（仮）集団によって推進されているからである（粉川哲夫『雑日記』「チュニジア・インパクト」<http://cinemanote.jp/dairay>）（粉川・杉村 2011より二重引用）。

チュニジアで起こったジャスミン革命などでSNS「facebook」が重用されたことからこれらの革命を通称「フェイスブック革命」と呼んだマスコミに反論する形で粉川は「ネットや携帯によるトランスローカル」を提唱した。

粉川「考えなければいけないことはインターネットが持っているトランスローカルな機能、つまり極めてローカルなことがグローバルに波及してしまうという要素、だから逆に言うところローカルなことをやっていけばそれはある場合にはグローバルになるということなんですね」（粉川・杉村2011、107頁）。

粉川「そういう場所のどこか一つがホットになると、それがまた別の形で広がっていったいろんな影響を及ぼしていくという面白いトランスローカルな反応が出るのです」（粉川・杉村2011、109頁）。

地理的に離れている人達がインターネットを通し、その距離を保ちながらつながる。そして第4章第2節で取り上げた、サイマル放送によって全国各地（つまり、被災地の「ソト」）で被災地の「ウチ」側の放送を聴けるようになったということも、インターネットとパソコン、そして何より携帯電話・スマートフォンの発達、そしてそれらが私たちに普及していることからここまでの現象になったのである。サイマル放送やインターネットを使うことで、「東日本大震災における被災地の状態」というローカルな事象がグローバルな事象になり、支援や活動の形が変わっていったのだ。

ところで、インターネットで情報を得る場合の困

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

難さというのは、完全にその人の自主性に委ねられているということであろう。自分で情報を得ようとしなければ得ることができず、その結果、総合性に欠けてしまいがちである。

ラジオには、ある種情報の総合性がある。そして、ラジオを聴く行為には「偶然性」が潜んでいる。それは第3章、FMピパウシの事例で取り上げた、「その地域の店で放送されているのをたまたま聴き、その放送や情報を知る」という事例を指す。それは車に乗っている際にもいえることだ。意識しなくとも、ふと耳にその情報が入ってくる。そしてその存在を「知り」、つながるということである。ラジオという、総合性・偶然性を抱えたメディアだからこそ、自主性が特徴のインターネットとお互いを補完する形で、親和性をもって結びついたのではないだろうか。

インターネットが発展することで、サイマル放送も発展する。現在はサイマル放送が始まってそう経過しておらず、認知度も低いかもしれないが、サイマル放送を継続することで認知度は上がっていくと思われる。認知度が上がり、ラジオ放送が地域をこえて発信されることを認識するうちに、「コミュニティ（＝地域）FM」の「コミュニティ」の内容を大切に作る動きもありながら、「コミュニティー・ラジオ」が指す「テーマ・コミュニティ」の内容もさらに重要視されていくのではないだろうか。

しかし現在も「コミュニティ（＝地域）FM」という前提で総務省は放送局を認可し、メディアとして放送するための免許を与える。上に挙げた新聞記事の例はあくまで海賊放送のようなものであり、かつての「ミニFM」の形でしかない。「地域」と「地域」が地理上の制約をこえてつながるためにはその地域に住む人々のよりどころとなる必要があると考えれば、「コミュニティ（＝地域）FM」という前提はなければならないが、「コミュニティ＝地域性」というかつてのステレオタイプは捨て、コミュニティFMというものをさらに多角的に考え、認めていかなければならないのではないかと。

地域に対して放送するためのコミュニティFMが、地域をこえ、つながるという、ある種の矛盾。インターネットが、私たちに「地域性以外のつながりの形」、「地域というテーマ以外の「コミュニティ」

による放送の形」を突きつけている。

注

- 1) 本稿で、「コミュニティ」は、特定の関係をもつ人々の共同体を指すこととし、「コミュニティFM」は、第1節で記述している通り、総務省から放送を認可され放送免許を取得している地域放送局のことを指すこととする。
- 2) 「Radiko（ラジオ）」とは「地形などの関係で元々難聴地域が存在すること」「かつて良好にラジオ放送の受信が可能であった地域が、高層建築物の建設やモーターなどの雑音源増加によって主に都市部を中心に受信環境が悪化していること」「若年層のラジオ離れ」といったラジオ業界が抱える諸問題の対応策として開始した民放ラジオ向けサイマル配信サービスの名称である。在京の民放ラジオ局（FM TOKYOなど）は関東圏で、在阪の民放ラジオ局は関西圏で聴取可能である。全国、全世界でその民放ラジオ局の放送が聴けるようになった訳ではない（東日本大震災時を除く。第4章第2節参照）。2010年3月15日から11月30日まで試験配信を行い、12月1日から本配信が始まった。
- 3) 第1章第4節参照。
- 4) 本稿でのストリーミング放送は、サイマル放送が始まる前（2005年以前）のラジオ放送のインターネット配信（同時配信）の一形態とする。ラジオ放送を、パソコンで利用できる映像再生ソフト「Real Player」などを用い、映像自体は配信せず音声のみを流すことで同時配信することである。放送を同時配信するという点では一緒だが、サイマル放送サービスのように複数の放送局が参加し、その中から聴取する放送局を選ぶということはできず、各放送局が独自に実施していた。
- 5) 臨時災害放送局とは、放送法第3条の5で規定されている「臨時かつ一時の目的のための放送」のうち、「暴風、豪雨、洪水、地震、大規模な火事その他による災害が発生した場合に、その被害を軽減するために役立つこと」（放送法施行規則第1条の5第2項第2号）を目的とする放送局のことである。災害発生時、口頭による申請があれば即座に免許（期限付き）の発行と周波数の割り当てが行われる。
- 6) ミニFMとは、FM放送の周波数帯を用い、電波法に規定する微弱電波で放送を行う微弱電波局である。開設には免許を必要とせず簡単に開設できるが、可聴範囲が著しく狭い（最大半径300mほど）。そのため、大半は児童館や大学生の課外活動、学園祭や運動会などの実況放送、商店街や町おこしイベントなどで使われている。

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

- 7) 本稿で「マイノリティ」は、「何らかの属性的要因（文化的・身体的等の特徴）を理由として、否定的に差別化され、社会的・政治的・経済的に弱い地位に置かれ、当人たちがそのことを意識している社会構成員……先住民や歴史的・地域的少数者（日本のアイヌ）も含まれうるし、場合によっては女性、子ども、障がい者なども含まれる可能性がある」（宮島・梶田 2002:3）」（松本 2004からの二重引用）を指すこととする。
- 8) FMピバウシの創設者であり前代表であった萱野茂氏は、2007年に亡くなった。現在、代表は空白のまま、同編成局長である茂氏の息子、志朗氏がほぼ代表として放送を執り行っている。
- 9) FMピバウシのサイト (<http://www.aa.alpha-net.ne.jp/skayano/menu.html>) に放送データを置いており、パソコンに音楽再生プレイヤーをインストールしていればいつでも聴くことができる。
- 10) アイヌ語の話者数について1996年の推定では、約1万5000人のアイヌの中でアイヌ語を流暢に話せる人は15人程しかいなかったとされる。さらに別の推定では、2000年時点でアイヌ語を母語とする人は千島列島では既に消滅し、樺太でもおそらく消滅している状態であり、残る北海道内の話者も平均年齢が既に80歳を越え、数も10人以下となっている、とされる。
- 11) 注10参照

◎参考文献

<著書・論文>

- 浅岡隆裕 (2007) 「地域メディアの新しいかたち」、田村紀雄・白水繁彦編著 (2007) 『現代地域メディア論』、日本評論社
- 上野俊哉・毛利嘉孝 (2002) 『実践カルチュラル・スタディーズ』、ちくま新書
- 金山智子 (2007) 『コミュニティ・メディアーコミュニティメディアが地域をつなぐ』、慶応義塾大学出版会
- 河合孝仁 (2009) 『地域メディアが地域を変える』、日本経済評論社
- 粉川哲夫 (1983) 『これが「自由ラジオ」だ』、晶文社
- 粉川哲夫・杉村昌昭 (2011) 「携帯革命はどこへ行く」、『インパクション』179、インパクト出版会
- 坂田謙司 (2003) 「コミュニティFMによるインターネット放送—インターネット時代における地域メディアの新しい展開—」、『マス・コミュニケーション研究』62、日本マス・コミュニケーション学会
- 坂田謙司 (2005) 「地域FM局の活動から見た公共放送への期待」、黒田勇編 (2005) 『送り手のメディアリテラシー：地域からみた放送の現在』、世界思想社
- 坂田謙司 (2007) 「コミュニティFMを巡る研究視点の再整理—営利・非営利を超えた議論活性化のための一

考察—」、『立命館産業社会論集』42(4)』

- 坂田謙司 (2009) 「メディア遊びとミニFM—マイナーメディアの文化論—」、高井昌史・谷本奈穂編 (2009) 『メディア文化を社会学する—歴史・ジェンダー・ナショナリティ—』、世界思想社
- 宗田勝也 (2007) 「FM79.7難民ナウ!の活動と市民メディアの役割」、『同志社政策科学研究』9(1)
- ソルニット・レベッカ著・高月園子訳 (2010) 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上るのか』、亜紀書房
- 田村紀雄編 (1983) 『地域メディア—ニューメディアのインパクト—』、日本評論社
- 田村紀雄編 (2003) 『地域メディアを学ぶ人のために』、世界思想社
- 津金沢聡広・田宮武編 (1983) 『放送文化論』、ミネルヴァ書房
- 日比野純一 (2007) 「コミュニティのラジオが果たす役割—日本と世界の温度差—」、田村紀雄・白水繁彦編 (2007) 『現代地域メディア論』、日本評論社
- マーシャル・マクルーハン (1987) 『メディア論—人間の拡張の諸相—』、みすず書房
- 松野良一 (2005) 『市民メディア活動—現場からの報告—』、中央大学出版部
- ラジオ関西 (AM神戸) 震災報道記録班編 (2002) 『RADIO—AM神戸69時間震災報道の記録—』、長征社

<新聞記事>

- 『朝日新聞』：2011年3月14日夕刊・全国、3月21日朝刊・大阪、4月13日朝刊・福島、4月19日朝刊・大阪、4月23日夕刊・大阪、4月19日朝刊・大阪、6月8日朝刊・丹波、7月6日朝刊・北海道、7月24日朝刊・宮城
- 『読売新聞』：2011年3月22日朝刊、3月22日夕刊、5月5日朝刊・兵庫、5月15日朝刊
- 『毎日新聞』：2011年3月17日夕刊・東京、3月21日朝刊・東京、3月28日朝刊・東京、3月31日夕刊・東京、4月6日朝刊・東京、4月7日夕刊・東京、4月11日夕刊・東京、4月19日朝刊・東京、4月30日夕刊・大阪、11月6日朝刊・兵庫

<参考ウェブサイト>

- 「JCBA 日本コミュニティ放送協会」<http://www.jcba.jp/index.html> (2012年1月2日閲覧)
- 「サイマルラジオ」<http://www.simulradio.jp/> (2012年1月2日閲覧)
- 「radiko.jp」<http://radiko.jp/> (2012年1月2日閲覧)
- 「FMわ い わ い」<http://www.tcc117.org/fmyy/index.php> (2012年1月2日閲覧)

コミュニティの「ウチ」と「ソト」をつなぐコミュニティFM（村上和史）

「FM ピ パ ウ シ 」 <http://www.aa.alpha-net.ne.jp/skayano/menu.html>（2012年1月2日閲覧）

「radiko.jp復興プロジェクト」 <http://fukkou.radiko.jp/>（2012年1月2日閲覧）

「『LISMO WAVE』東北地方太平洋沖地震支援サイト開設のお知らせ」 <http://www.kddi.com/news/topics/20110315.html>（2012年1月2日閲覧）

「粉川哲夫『雑日記』「チュニジア・インパクト」」
<http://cinemanote.jp/dairay>（2012年1月2日閲覧）

（むらかみ かずふみ

大阪大学文学部日文学専修2011年度卒業生）